

# 子どもたちの明日 Children, Our Future

2006 年 12 月 NO.80



バンキアン地区保育所 ©小林正典

## 目 次

- ② どう対決する 広がる汚職と格差 - CYR代表、カンボジア出張報告 -
- ⑥ 「みんなで布チョッキン」 手づくり遊具、カンダール州子ども 1,500 人に届く - 日本でカットされた布の行方を追う -
- ⑧ デング熱でカンダール州子ども 2 名死亡 - カンボジアデ일리-

幼い難民を考える会 (CYR) は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に感銘され、1980 年に組織されました。子どもたちが心身ともに健全に成長し、その親たちが人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。

## CYR 代表 出張報告



CYR 代表理事 深水 正勝

# どう対決する 広がる汚職と格差

2006 年 8 月、CYR 代表の深水正勝がカンボジアへ出張し、地雷撤去の現場を訪問するとともに、CYR として今、力を入れている都市貧困層の家庭調査へ同行しました。戦争の遺物が未だに残るカンボジア。その厳しい現状を代表がお伝えします。

### 1 年ぶりのカンボジア

『カンボジア和平 15 年 発展に「独裁」の影 広がる汚職と格差』朝日新聞の記事にこんな大きな活字が躍った。一言で、カンボジアの社会の現状を切り取った表現です。八月半ばに、一年ぶりのカンボジアを訪れました。CYR カンボジア事務所スタッフの関口さん、山極さんが計画してくださって、バツ

タンバンから、更に奥地へと初めての旅に出ました。バタンバン迄の道路は見違えるように完備され、三時間ほどの快適なドライブ。ところが、それから嘗てボルボトの支配下にあった、バイリン地方のカムリエン迄は、相変わらず凄まじい道路でした。

### 地雷現場を訪ねて

この地域で高山良二さんという方が、JMAS 日本地雷処理を支援する会という NGO のメンバーとして村に飛び込んで活躍しておられると聞き、三人で出かけたのです。バタンバンの教会を訪ねてフィリピン人神父さんにお会いしたら、一昨日、同じ道で橋が壊れていたので数メートル迂回したところ、自分達の数台前の大型トラックが地雷を踏んで吹き飛ばされたということがあったという話でした。

町を離れてすぐ未舗装の道でこぼこ道を四輪駆動車で走ります。道路の両側は相変わらず田畑や田んぼが広がって続いているのですが、なんとその中に点々と小さな赤いどくろの標識が見え始めました。敵密には、まさに地雷敷設地域ですが、村人たちはそのまま土地を耕し家を建てて生活しているのです。

高山さんは、1992、93 年、自衛隊が参加したカンボジアにおける国連平和維持活動 (PKO) の一員として、カンボジア復興のため国連整備で働いたそうなのですが、特に地雷の撤去を専門とされる技術者で、02 年、自衛隊を定年退官し、数人

の仲間と一緒にこれからの人生をカンボジアの地雷撤去に捧げる決心をされたという方でした。

一言で地雷といっても目的によって種類があり、カンボジアの農村でも多用されたのは、爆発してもせいぜい大人の片足を吹き飛ばし、結果、他に二人の兵隊が担架に乗せて被害者運ぶ事になり三人の兵力を奪うという目的の直径 10 センチほどのものでした。勿論、他に戦車を吹き飛ばすほどの大きな地雷も混ざって敷設されているので、撤去には大変な努力と技術が必要です。

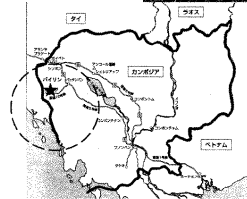
### 国境地域では・・・

バイリンの町は、現在もボルボト派であった人たちが住み、生活しているのですが、戦後 15 年、嘗て政府軍との戦いで次第にタイ国境へと追い詰められたとき、撤退するボルボト軍は、現地の農民に多量の地雷を配ってそこらじゅうの農地に敷設させたそうです。

カムリエンという国境の町は、タイから多くの人たちがカジノのために集まり、国境といっても住民は自由に行き来する所です。カジノの周りには貧しい人々の小さ



地雷原を示すドクロマーク



地雷撤去現場の見学

左から3番目が高山さん、4番目が深水代表、1番目が山極、右から2番目が関口

な小屋が立ち並び、カジノのおこぼれで生活していました。

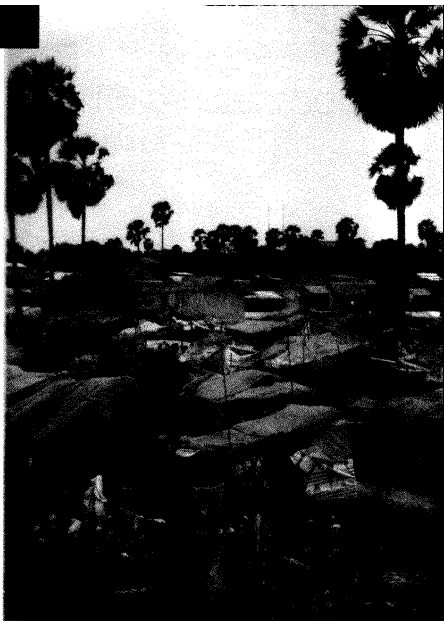
### 女性たちへ収入を

高山さんは、単身でこの地に家を借り、日本政府からの多額の援助金を支えに活動しているのですが、都市からはるかに遠いこの地方の農村の女性たち

が、仕事も無いために陥る恐れのある様々な困難を考慮して、彼女たちに6週間の特別地雷撤去の技術を教え、一ヶ月75ドルというブノンベンの大多数の紡績工場で働く女性たちの月収をはるかに上回る収入を確保し、農村に残って自立した生活が出来るようにという目標で働いておられました。



地雷原のとなりで生活する村人



地雷撤去作業の見学

早速、私たちが地雷爆発から身を守る防具服を着て、地雷撤去の現場に行つて作業を見学することになりました。道路に車を止めて小川を渉ると、一面に大豆の苗が育っていました。そこから地雷撤去作業のための作業道が張つてあり、「決してその線の向こうには足を踏み入れないでください」と言われながら20メートルほど進んだところに、10人ほどの防具服に身を固めた女性たちと、指揮をする数人の男性たちが働いていました。二人ずつのペアになって地雷探知機を手を少しずつ探知しながら進むのですが、はるかかなたの目標の地まで、まさに気の遠くなるような作業です。

大豆の苗のそばに、地雷

間もなくして、探知機が何かに反応したときに聞こえる金属性のピーピーという高い音がしました。女性たちが早速、小さなシャベルのようなもので薄く地表を削ります。見守る高山さんから、「もっともっと慎重に」という指令が飛び

ます。そして間もなく、そこに小さな地雷が顔を出しました。埋められた地雷のわずか10センチのところには、農民が植えた大豆の苗が整然と並んでいます。線の一振りが間違えば爆発させていたに違いのない対人用地雷が10数年もそのままここにあったというわけでした。女性たちは、早速撤去作業専門の男性たちに代わり、その場で爆発処理を行うのですが、私たちは、更に遠くまで退去させられました。

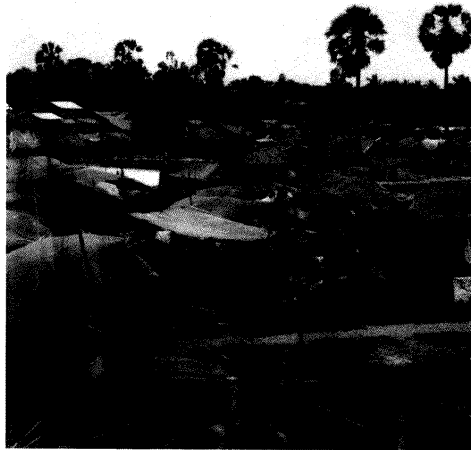
の地方から国境を越えて、タイに豊かな農産物を輸出するという、本当に平和な町に安住させることだそうです。また、ぜひ多くの日本の若い人たちがこの辺境の地にやってくる、戦争の現実の一面を実地体験してもらいたいとおっしゃいました。私たちににとってはわずか一日の地雷撤去という体験でしたが、まさに印象的な一日でした。プノンベン近郊の農村で働いてきたCYRですが、カンボジアの広い地域にまだまだ戦争の遺物が存在しており、このように地道に働いていらっしゃる方々にお会いできたのは大きな収穫でした。

長い道のりの先

高山さんの夢は、こうしてメートルずつ安全な農地を確保することによって、近い将来こ

強制移転先のスラム

写真：小林正典



場の近くまで運んでいるのもやはり子どもたちでした。

強制移転させられた住民は

プノンベンに帰ってきて、CYRの事務所直ぐ前にあった首都最大のスラムが、強制撤去によって取り壊され、その住民たちがトラックで約20キロほど離れた郊外へ、それこそ「廃棄物を捨てるように移動させられた」と、住民たちが訴えた地に行きました。車でなら何とかありますが、足の無いスラムの人たちは、こんな所に下ろされて遠方にくれたことでしょうか。毎日の生活のために小金を稼ごうにも、どうやって紡績工場のあたりまで行けるのでしょうか。

必死で生きるスラムの人々

CYRが支援を行っているトロピエンズパイ地区にある工場の周りには、道路の脇にそれこそ足の踏み場も無いほど小さな屋台をだして、スラムの家で料理した食べ物を運んで、工場の休み時間にとどめてくる女工さんたちに安い食事を売って生活している人たちがたくさんいます。まさに貧しい人たちが互いに支えあって毎日を生きている現実です。子どもたちも、親の手伝いをして雨水を水溜りから運んで野菜を洗います。出上がった野菜の煮付け、油で揚げたものなどを、工

広がる汚職と格差

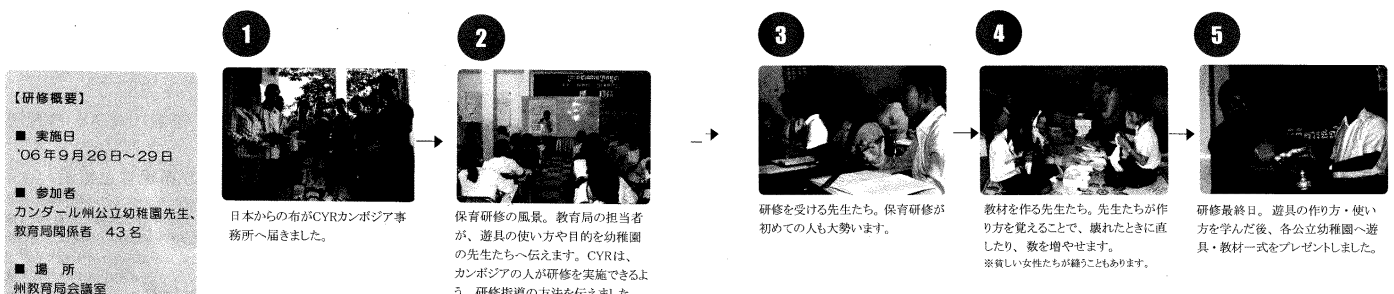
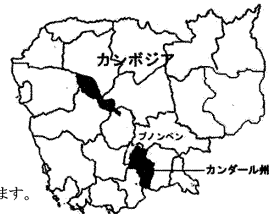
この地域の人たちの住民集会があり、この地に既にCYRが建設した5歳児クラスと小学校2年生までの建物の部屋に50人ほどの母親たちが集まり、「ぜひ3年生以上の教室も建て加えてほしい」という訴えを聞き加えました。他にも、緊急な医療処置の出来る医療センターの一角がほしいという切実な声もありました。スラムの住民たちが強制立ち退きにされた後には、ショッピングセンターが出来る予定も聞きました。広がる汚職と格差にカンボジアに若い人たちはどのように対決していくのでしょうか。大きな問題が残りました。

※学校建設は、工藤聖記会基金・熊田久志様のご支援を得て実施しました。

「みんなで布チョッキン」

遊具、カンダール州幼稚園の子ども1500人へ届く  
～日本でカットされた布の行方を追う～

カンボジアの子どもたちに人気の人形・ボールづくりの一部を日本で行う活動、「みんなで布チョッキン」。日本から送られた布は、今、カンボジアの人たちによって縫い上げられ、着実に現地の幼稚園の子どもたちに使われています。カンボジアの公立幼稚園には遊具がほとんどありません。教室には先生が手書きした教材がボンツ。CYRは、カンダール州全ての公立幼稚園の先生を対象とした巡回保育研修の中で教材・遊具を配布し、その作り方と使い方を伝えています。全研修生の向こうにいるのは園児約8000人。今回は、日本から送られた布を使用した研修の様態をご紹介します。



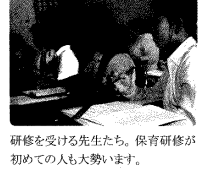
【研修概要】  
■ 実施日  
'06年9月26日～29日  
■ 参加者  
カンダール州公立幼稚園先生、教育局関係者 43名  
■ 場所  
州教育局会議室  
■ 研修内容  
遊具・教材作り、その目的・使い方の実践指導



日本からの布がCYRカンボジア事務所へ届きました。



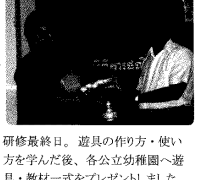
保育研修の風景。教育局の担当者が、遊具の使い方や目的を幼稚園の先生たちへ伝えます。CYRは、カンボジアの人が研修を実施できるよう、研修指導の方法を伝えました。



研修を受ける先生たち。保育研修が初めての人も大勢います。



教材を作る先生たち。先生たちが作り方を覚えることで、壊れたときに直したり、数を増やせます。



研修最終日。遊具の作り方・使い方を学んだ後、各公立幼稚園へ遊具・教材一式をプレゼントしました。

研修参加者の声

サウ・チャンタール研修指導者 (州教育局幼稚園事務局長)  
以前は保育研修と言っても教材もなく、ただ理論を学ぶことしかなかったのが、CYRの支援によって教材を実際に先生たちが手に取り、その使い方や目的を自分自身で学ぶことができました。私自身も研修指導が出来るようになり自分自身に誇りを持つようになりました。今までになかった知識や体験が身についたことはとても嬉しいです。

コン・ソクティア先生 (スダウ・コンライ公立幼稚園)  
これまで幼稚園には教材がほとんどありませんでした。研修で教材をもらえることで、子どもにとって幼稚園に通うことが魅力となるし、初めて園に通いだした子が家に帰りがたくなります。日本からの布は、新品で質がとても丈夫なのでありがたいです。今困っていることは、お寺の中に幼稚園があるけれど、そこから出て行くように言われていること。子どもは126人いるけれどその後の行き先がありません。

ソグット・ビー先生 (ワット・コー公立幼稚園)  
今日は遊具の作り方を学ぶために研修に参加しました。そうすれば幼稚園で作れるし、増やすことができるから嬉しい。教材が増えれば子どもが幼稚園に興味を持ち始めて毎日通ってくるようになると思います。子どもたちにグループでのボールの遊び方を伝えたらとても楽しく遊べます。保護者からの評判もあがって、幼稚園に対する理解を示してくれると思います。今、困っていること？それは公務員のお給料が低いことです。



「みんなで布チョッキン」にグループで参加しませんか？  
現在までに企業、学校、団体の方々など広くご参加いただいています。お問い合わせは事務局まで。

カンボジアで毎日発行される英字新聞、カンボジアデイリー。記事の内容は、身近な生活のことから政治・国際の分野まで多岐にわたります。今、カンボジアでは何が起きているのでしょうか？新聞からのニュースをお伝えします。

デング熱でカンダール州の子ども2名死亡  
ケイ・キムソン

カンボジアデイリー  
2006年9月13日

地元医師やコミュニティ会議に衝撃を与えたデング熱ウイルス感染が発生して以来、カンダール州のカサックカンダールでは、二人の小児がデング熱で亡くなり、およそ100名が蚊を媒介とするウイルスに感染している。ピアサワーコミュニティの議員であるイェムヨーン氏は、月曜日、デング熱により一歳の女兒が自宅で死亡し、また同日、五歳の女兒がプノンベン病院に向かう途中で死亡したことを発表した。

“このコミュニティでは、今までにない速さで感染が拡大している。”とイェム氏は火曜日に述べた。このコミュニティの大部分が洪水に見舞われ、そのためデング熱ウイルスを保有しているヒトシジミカが大繁殖している。死亡した五歳の母親であるモンソフイーブさんは、“亡くなった女兒の二歳の妹もデング熱ウイルスに感染しており、プノンベンにある国立ベディアリック病院に入院している”と話した。彼女の5歳になる甥もまた熱を患っているようだ。“本当に信じられないことです。家族中の子どもたちがみなデング熱に感染しつつあります。”と彼女は語った。イェム氏によると感染を抑えるための対策としての蚊の幼虫（ボウフラ）用の殺虫剤などの薬品は、このコミュニティ内では使い果たしてしまったようだ。

アンセイ氏はピアサワー地区の私立病院で医者をしている。アン氏によると、100名の感染した児童の大部分が、プノンベンのカンタポア病院へ治療のため運ばれているようだ。“今月初めの感染は本当に深刻なものだった。”そして、“新たな感染者はいまだあるが、感染率は減少しつつある”と加えた。

アン氏は、“デング熱ウイルス感染はたいがい大雨の後に発生し、田植えの時期と重なることがしばしばある。田植えの時期、親たちは田植え作業に追われる。村民の中には作業で多忙であるために子どもたちの世話がおろそかになってしまう者もいる。”と指摘した。

ヌットソム保健相は“今年のデング熱ウイルス感染例は増加している。保健当局に対し、感染が報告されている地域へ赴き、対策を講じるよう指導している。”と述べた。

“今、国民には教育が必要である。そして、村民はデング熱の予防法と対処法を知らなければならない”とヌットソム保健相は述べた。

翻訳： 交野茂子、長岡彩子

C Y R の活動をご支援ください

年会費 正会員 ¥10,000 学生会員 ¥3,000 団体会員 ¥30,000

下記の口座にご送金ください。

郵便振替 No.00110-9-36227 (特活) 幼い難民を考える会 銀行振替 三菱東京 URJ 銀行六本木支店 (普)No.1351747  
特定非営利活動法人 幼い難民を考える会

※CYRは認定NPO法人です。5,000円を超えるご寄付は寄付金控除の対象となります。



特定非営利活動法人  
幼い難民を考える会  
CYR CARING FOR YOUNG REFUGEES

〒106-0048 東京都港区元麻布3-2-20 丸純麻布ビル2F  
TEL: 03-3786-6377 FAX: 03-3786-6389  
Email: info@cyr.or.jp  
URL: http://www.cyr.or.jp

子どもたちの明日 80号  
◆発行日: 2006年12月5日  
◆発行人: 深水正樹